

3 森鷗外と国家 篠田 正浩氏 (映画監督) (1/2)

あのときから
始まった
150年の
軌跡

西洋と東洋の間で懊悩 遺言に込めたジレンマ

映画監督の篠田正浩氏は77歳。戦時下の中学校で「捕虜になるな」と切腹の作法を学ばされた。作品ではこうした国家の狂気への検証も続けてきた。森鷗外の小説を映画化した「舞姫」などを通し、明治の知識人の苦悩を聞いた。

映画「舞姫」のラストシーンで、ドイツに恋人エリスを捨てて帰国する主人公が乗った船の向こうに、富士山を大きく映し出しました。ナショナリズムの象徴です。

映画の主人公は鷗外自身と言つてもいいと思います。原作は、古めかしい純愛小説と思われていますが、実は2人を引き裂いたのは、国費留学した鷗外が担わなければならない国家の存在ではないでしょうか。ここには「個人が属さなければならぬ国家とは何か」という、明治の知識人が直面した問題が存在していると思えます。

〈維新政府は幕府と同様にキリスト教を禁じ、長崎の浦上から3000人を超える信

者を改宗のため各藩に預けた。新政府の神道国教化を理想的に支えた津和野藩(島根)は1500人余りを受け入れ、乙女峠の廃寺で棄教を迫り、水責めなどで三十数人が殉教した。

1868(明治元)年から73年まで続いたこの宗教弾圧を、62年に生まれ72年に上京するまで続いたこの宗教弾圧

1868(明治元)年から73年まで続いたこの宗教弾圧を、62年に生まれ72年に上京するまで続いたこの宗教弾圧

1868(明治元)年から73年まで続いたこの宗教弾圧を、62年に生まれ72年に上京するまで続いたこの宗教弾圧

1868(明治元)年から73年まで続いたこの宗教弾圧を、62年に生まれ72年に上京するまで続いたこの宗教弾圧

1868(明治元)年から73年まで続いたこの宗教弾圧を、62年に生まれ72年に上京するまで続いたこの宗教弾圧



インタビューに答える映画監督の篠田正浩氏

「沈黙の塔」は、鷗外が10年の「三田文学」11月号に発表した短編小説です。インド中西部の古都の丘の上にカラスが飛び回る沈黙の塔が屹立し、そこに死骸が運び込まれている。それは「バアシ族」が、仲間のうち「危険な書物を読む奴」を殺し死骸をカラスに食べさせたという話ですね。

この中で鷗外は「この国、いつの世でも、新しい道を歩いて行く人の背後には、必ず反動者の群がいて隙を窺つて

「ただ、まゆみ氏 1901年岐阜県生まれ。早稲大学根拠に出場。53年松竹に入社し映画監督に。67年、妻の女優、岩下志麻さんと共に独立プロ「表現社」を設立し「心中天網島」などの傑作を発表した。ほかに「瀬戸内少年野球団」「スパイ・ゾルゲ」など。

国憲法を公布する。この中に「天皇八神聖ニシテ侵スヘカラス」「陸海軍ヲ統帥ス」と書かれた時から、これ以降の戦争が「聖戦」になったんです。天皇のために死ぬことが美化され、中学生でも切腹の練習をやらされた。そういうことを含め明治の45年は、その後の大正、昭和の日本の運命を決定的にした時代だと言えます。

鷗外と明治国家という見地からは、大逆事件の際に発表された「沈黙の塔」という小説に、注目する必要があります。

1910年、明治天皇暗殺を計画したとの理由で社会主義者らが逮捕された。現在ではでっち上げによる思想弾圧事件と認識されているが、24人が死刑判決を受け幸徳秋水ら12人が処刑された。

こうしてある機会に起って迫害を加える。ただ口実だけが国により時代によって変る」と書き、新しい思想に対して寛容でないこの国を呪っているようにも読めます。

こうした鷗外の思想が表れているのが、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍部員トアレドモ生死ノ別ルハ瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス」という遺言です。陸軍軍医として最高の地位である軍医総監まで務め、国家にすいぶんお世話になったけれど、もう無用のこととしてくれという怒りすらあるような感じがします。

鷗外は、封建制度にとどまっている東洋と、近代の理性を発見した西洋に引き裂かれて、同時に、国家と個人の関係にも懊悩した、明治という時代のジレンマを一身に引き受けた知識人だったと思えます。その真情が、この遺言に込められているような気がしています。(聞き手・立花珠樹、写真・藤井保政)